

●本会の動き●

☆ケミカルエンジニアリング・カフェを終えて☆

2016年12月3日、東京農工大学小金井キャンパスにて第4回となるケミカルエンジニアリング・カフェ(略称CEカフェ)が開催された。この企画は、シニアエンジニアが化学工学を武器に企業においてどのような仕事をしてきたか、自らの体験を語るとともに、学生が日頃感じている疑問を問いかけることにより、化学工学を学ぶ意義を確かめ、今後の進路に活かすことを狙いとしている。

CEカフェは、化学工学会関東地区学生会と化学工学会SCE・Net(シニアケミカルエンジニアズ・ネットワーク)との共催である。化学工学会関東地区学生会とは首都圏にある8大学の化学工学専攻及び研究室の大学に属する学生が運営する学術団体である。このような企画やポスター発表などの企画の運営及び参加を通じて、他大学の研究の状況や企業の現場を知り視野を広げることが目的としている。また、他大学の学生と交流することで幅広い人脈の形成や、研究又は就職などの情報交換を行うこともプラス面の一つである。

CEカフェの参加者は、SCE・Netから11名、教員1名、そして都内5大学から33名の学生(博士課程1名、修士課程23名、学部4年生9名)の計45名と、多くの参加者が得られた。

プログラムは、シニアエンジニア4名による講演(1.5時間)、パネルディスカッション(1時間)、懇親会(2時間)の三部構成とした。講演会では様々な業種のシニアの話聞くことで、学生に化学工学により理解を深めてもらい、それをきっかけにパネルディスカッションや懇親会での会話の糸口にして、互いの交流と化学工学への理解を深めてもらうことにした。

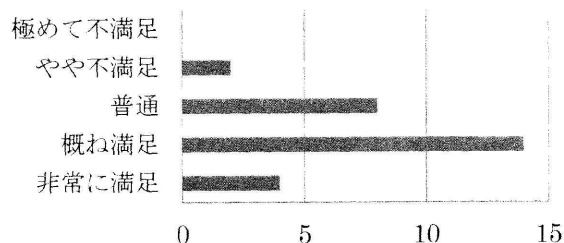
講演会では、化学メーカーやエンジニアリング企業等での経験を、猪股勲氏、神田稔久氏、八木宏氏、澤寛氏から講演いただいた。アンケートでは多くの学生が「社会で活躍してきた方の経験談が聞けて良かった」と答えており、目的を果たすことができたと考えられる。一方で、講演の内容をもっと学生の興味のあるものにすべきという意見も見受けられ、学生がシニアの方達に何を語っていただきたいのかというニーズの把握をより詳細に行うことが今後の課題としてあげられる。

パネルディスカッションでは、昨今、絶滅危惧学科ともいわれ始めている化学工学に関して、「化学工学は本当に必要とされているのか?」というテーマを取り上げた。このテーマに関しては、多くのシニアの方から意見をいただくことができ、化学工学が如何に必要な学問であるかを改めて認識することができた。また、参加していた教員の方もこれに関して意見を述べていただき、化学工学という学問の重要性や大学における教育についての議論が成され、大変活発な討論となった。一方、この討論が盛り上がりすぎた結果、質疑応答の時間が短くなってしまい、パネルディスカッションの時間を長くしてほしいという意見を数多くいただいた。

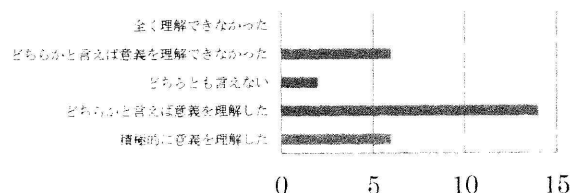
懇親会では、机を二つに分けて立食形式で行ったことで、学生が移動しやすく、お酒の力も借りて多くのシニアの方々と積極的に話す姿が見受けられた。講演会やパネルディスカッションでの緊張感が解け、シニアの方に働きがいや社会人になってからの生活等、様々な質問をぶつけて話題が盛り上がりつつあるように感じた。

全体の印象として、今回のケミカルエンジニアリング・カフェに対して非常に満足、概ね満足の回答が多く得られたことから企画は成功であったといえる。成功した要因は、やはり普段はあまり聞くことのできないシニアの体験談を聞くことができたこと、幅広い業種の方々との技術的な接点を得られたことであると考えられる。学生の側では化学工学技術者がどのように社会で活躍し

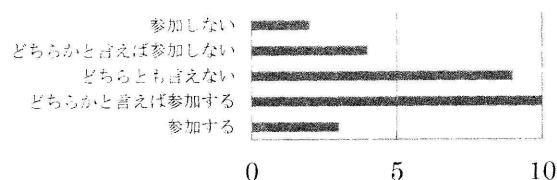
(1)ケミカルエンジニアリング・カフェに参加して満足していますか



(2)参加して、貴方は化学工学を学ぶ意義を理解しましたか



(3)ケミカルエンジニアリング・カフェを今後も開催するとしてら参加しますか



(4)ケミカルエンジニアリング・カフェをより良いものにするには何を改めたらよいですか

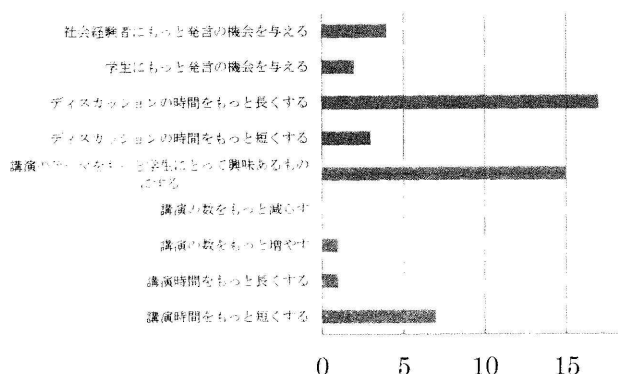


図1 アンケート集計結果



写真1 懇親会後の集合写真

ているのかを知りたいと考えており、それに対してシニアの方からは技術者の活躍の場や社会人として何を学んだか、さらには化学工学という学問がどのように社会で必要とされているかを答えていただいた。学生の側でも改めて、化学工学の大切さを知り、化学工学を学んでいく意欲やそれをどうやって活かしていくかを、学ぶ良い機会になったと考えている。

最後に、本企画を開催するにあたり、化学工学会およびSCE・Netから費用援助を受けるとともに、東京農工大学長津雄一郎准教授からも様々なサポートいただいた。ここに記して御礼を申し上げる。

(東京農工大学大学院工学府 新井海太郎)